

平成 31 年 1 月 8 日

早世を惜しまれた名将・蒲生氏郷

横浜歴史研究会新年講演会 竹村紘一

弘治二年（1556）～文禄四年（1595）二月七日

鶴千代、忠三郎、飛騨守、侍従、左近衛少将、正四位下。洗礼名レオン。

人質から信長の娘婿へ

六角佐々木氏の重臣近江日野城主蒲生賢秀の嫡男。永禄十一年（1568）、父が信長に臣従した折、人質として岐阜に送られる。

信長の前で毎回武辺の話があったが、氏郷は十三歳の若さで常にその席に列した。深夜に及んでも、最後まで飽きることなく、一心不乱に語るものの口元を見つめている。稲葉一鉄はこの様子を見て「蒲生の子は並の者ではない。彼がひとかど優れた武勇者にならなければ、他になるものがあるまい」と言ったという。信長も氏郷の非凡さを一目で見抜き、小姓として抜擢。元服の際には信長自らが烏帽子親となった、弾正忠信長の「忠」の文字を与えられ忠三郎賦秀と名乗る。翌年には伊勢・大河内城攻略戦で初陣を飾り、兜首を取る戦功を挙げ信長の期待に応えた。その年の冬、信長は二女（冬姫と伝わるが異説あり）を氏郷に妻として与えている。人質となってから二年足らずで、信長の一門衆に加えられたのである。部下をあくまで才能でしか評価しない信長にしてこの厚遇であるから、氏郷の有能さが判ろうと云うものだ。以後、朝倉攻め、浅井攻め、伊賀攻め、信濃攻略等に参加して奮戦。

本能寺の変以降は秀吉に従う

天正十年（1582）、本能寺の変で信長が斃れると、安土城に馳せ参じて遺された夫人たちを救出、日野の自城に引き取って父・賢秀と共に守護した。そして諸将が去就に迷う中、率先して秀吉傘下に身を投じた。この段階では主君の仇を報じる秀吉の正当性を支持していた。その後、秀吉は信長の後継者を目指し清州会議を経て織田家筆頭家老の柴田勝家と対立する情勢になった。両者はともに、他の織田氏の家臣たちを味方に招聘すべく盛んに勧誘を行ったが、畿内を中心に、山崎の合戦で勝利した秀吉に味方する諸将が多かった。

氏郷も秀吉と勝家の双方から誘いを受けたが、仲のよい信雄が秀吉に味方し、秀吉から領地を授与していたこともあって、秀吉に味方することにした。以前に近江在の武将として父と共に柴田勝家の与騎として参陣したこともあり勝家とも親しかったので苦渋の決断であったかも知れない。

この際に秀吉からの要請を受け、妹の三条殿（とら）を秀吉の側室として差し出した。こうして氏郷は秀吉とも義兄弟になり、関係が深まって行く。この戦いは北伊勢、美濃、北近江の三ヶ所で展開される広域戦となった。

氏郷は北伊勢の戦いに加わることになり、嘗てその陣に与騎として参陣した大恩ある勝家と対決する事態は避けられた。そして秀吉と敵対した滝川一益と対戦し、峰城等滝川方の城を攻め落とす戦功を挙げた。

やがて秀吉が勝家を賤ヶ岳で討ち破り、北之庄城を落とし柴田勝家を自決させ大勝を収めると、氏郷は報償として伊勢の亀山城を与えられる。しかし氏郷

は、「亀山城は関氏が先祖代々、受け継いで来た城なので、関盛信（正室は神戸具盛同様に蒲生定秀の娘で蒲生賢秀の姉妹）に与えて欲しい」と申し出て秀吉の了承を得るといふ義理堅い面もあった。

その後も、秀吉に従い、小牧の戦いでは二重堀を守り、撤退の際には殿軍を務め、その功によって近江日野六万石から伊勢松ヶ島十二万石へ増移封された。

ここでも氏郷は商業を奨励、城下町を繁栄させて、内政家としても優れた手腕を発揮している。その後も秀吉麾下の勇将として九州征伐、小田原の陣と転戦を重ね、天正十年（1590）には会津黒川で四十二万石を与えられ、その後の葛西・大崎一揆等の紆余曲折を経て遂には会津九十二万石へ封ぜられた。家康を牽制し、伊達政宗を抑える重任である。栄枯盛衰の激しい戦国乱世とは云え、わずか十年弱で六万石から九十二万石への出世は他に類を見ない。

信長同様、秀吉も氏郷を高く評価し常に味方として厚く遇していたが同時に警戒心も有していた。信長の娘婿である氏郷が織田家を篡奪同様にした秀吉としては、織田一門となった氏郷の真意を量りかねていた面もあろう。

会津四十二万石に封じられる

小田原の役が終わった後、東北の押さえとして会津四十二万石を与えられた。漸く関白の威令に服したとはいえ反覆常ない奥羽鎮護が最大の役目であるが、徳川家康への押さえと伊達政宗への牽制が重要な役目であったことは言を俟たない。考えようによっては、氏郷自身も家康や政宗に牽制されることになるのである。二虎競食の秀吉の高等戦略であったとも考えられる。

小田原の役後の関東には誰を封じるか、秀吉も迷ったという。一説には堀秀政、細川忠興、蒲生氏郷が候補者であったが、堀秀政は小田原陣中で病没し、細川忠興はその任に非ずとして固辞したこともあり、最終的には蒲生氏郷が会津に封ぜられ、関東には家康が入府した。堀秀政は氏郷の良きライバルで信長に気に入られ、信長没後は秀吉に仕え歴戦に功あり、治世においても「名人久太郎」と称せられた傑物であったが、惜しくも小田原の役の陣中で病没した。細川忠興も知勇兼備の将ではあるが気性が激しく二人に比べては人物が小さく候補者に上ったのが不思議であると思われる。

大封を得た氏郷が広間の柱に寄りかかり涙ぐんでいた。それを見た同僚（山

崎右近とされる)が感涙を流していると思ひこみ「ありがたく思われるのはごもっともなことでございます」と声を掛けると、「そうではない。小身ではあっても、都の近くにいれば、一度は天下に号令する望みもある。いくら大身のもので、雲を隔て海山越えた遠国にいては、もはや天下人への望みもかなわぬ。わしはすでに不要な者になったかと思うと、不覚の涙がこぼれたのだ」と答えたという。

また、秀吉は近習の者に「氏郷は奥州に行くことをどう思っているのか」と問うた。「大変迷惑がっております」と答えると、「いかにももっともなことだ。氏郷をこちらに置いておくと、恐ろしい奴なので、それで奥州に遣わすのだ」と言ったとの話も伝わる。いずれもよくある英雄譚のようなもので事実か否かは不明である。

また、朝鮮の役の戦局が思わしくない時、諸将を集めて詮議した。その席上、氏郷は「ご心配には及びません。朝鮮を私に下さるのなら、見事切り取ってご覧に入れましょう。なにとぞ私に仰せつけ下さい」といった。それ以降、秀吉は氏郷に警戒心を抱いたという。この辺りの話は後世の創作の可能性が大である。

会津での治世

会津において、氏郷は重臣達を領内の支城に城代として配置した。そして黒川城を蒲生軍流の縄張りによる城へと改築した。七層楼の天守を有するこの城は、氏郷の幼名に因み、蒲生家の舞鶴の家紋に因んで鶴ヶ城と名付けられた。氏郷の幼名鶴千代からとの説もある。築城と同時に城下町の開発も実施し、町の名を黒川から「若松」へと改めた。「若松」の名は、出身地の近江日野城(中野城)に近い馬見岡綿向神社(現在の滋賀県蒲生郡日野町村井にある神社、蒲生氏の氏神)の参道周辺にあった「若松の森」に由来し、同じく領土であった松坂の「松」という一文字もこの松に由来すると言われている。

氏郷は会津の領民にも改宗を勧め、会津若松市内には天子神社という教会跡があり、支城の置かれた猪苗代にはセミナリオがあったとされる。

氏郷は農業政策より商業政策を重視し、旧領の日野・松阪の商人を若松に招聘し、定期市の開設、楽市楽座の導入、手工業の奨励等により、江戸時代の会津藩の発展の礎を築いた。

数多くのエピソード

氏郷にはその高潔な人柄を偲ぶエピソードが数多く残されている。乱世には珍しいヒューマニストでもあった。秀吉に忠実に仕えながら、大義に背く事には反撥したという。師・利休(茶人。氏郷は利休七高弟のひとりである)が秀吉に誅された時も、許しが出るまで遺児を自城に匿った。朝鮮出兵の際も、激しい怒りと反対を露わにし、「猿め、死に場所を失うて狂うたか」と悲憤した…と伝えられている。

氏郷の武将としての高い評価は、徳川家康の牽制役や反復常ない伊達政宗の監視役として会津に封ぜられたことから良く判るのである。氏郷を煙たがった政宗が氏郷排除に向けて種々の手を打った。

また、氏郷は「主将たるもの人を使う時は自ら先頭に立たねばならぬ。後ろから、ただ、かかれ、かかれというだけではうまくはいかぬ」と言い、新参者に

は「わが旗本には銀のなまず 鯰尾の兜をいただき、先陣に進むものがあるから、この者に劣らぬ働きをせよ」といわれた。それは一体誰だろうと思っていると、まさにそれは氏郷自身であった。まことに武勇に優れることこの上なかった。

また、このような逸話も残されている。

ある時、玉川何某という世間で評判の智者を紹介されこれを雇った。氏郷は大いに喜んで十日ほど夜話に彼を迎えたが、その後追い出してしまった。

不思議に思った家臣が、「いずれは謀臣にでもご登用なさるかと思っていたのですが、お暇を出されたのは何か考えあつてのことでしょうか」と尋ねた。すると氏郷は「世の智者というものは、見てくれだけで言葉巧みに人の目をたぶらかすものに過ぎないのだ。今の世は文字に暗い時代だからこのような者が智者に思えてしまうのだ。玉川は初め、わしを大いに誉め、次に諸将を誹り、わしに気に入られようとした。また交友の良いことを並べ立てて自分を良く見せようとした。このような人物は智者だとしても、身边に置くにはよろしくない人物だ。だから暇を出したのだ」といわれた。

果たして玉川はその後他家に仕えた折、忠臣を退け、おのれの威を振るつたので、その家はすっかり衰えてしまったという。家臣は氏郷の明察に感服したという。

文禄四年(1595)、伏見で没。氏郷が四十歳の若さで亡くなった時、当時の人々は秀吉が毒殺したのだと噂し合ったという。直江兼続と石田三成が共謀して毒殺したとの説も囁かれた。

最近の研究では、事実は下血症(直腸癌とも)であったようで毒殺ではないというのが定説になっているが、英雄の余りにも早い惜しまれる死に毒殺説が広がったようである。出自家柄、信長の娘婿、知勇兼備の将才と抜群の戦闘能力、幅広い人脈と若さは氏郷をして天下を狙える要素は多分にあったことは間違いないが、天下人になるにはそれだけではまだ足りないのである。健康を含めた長寿と運が必要であるといえよう。墓所は大徳寺黄梅院。会津興徳寺にも五輪塔と歌碑がある。正室の冬姫は氏郷没後、出家。蒲生氏の滅亡を見届け、寛永十八年(1641)、没。京都百万遍知恩寺に墓がある。

氏郷は関ヶ原の前に病死したが、かれの遺臣たちの何名かは石田三成に仕え、徳川家康と戦った。蒲生真令(旧名は横山喜内。頼郷とも)、蒲生郷舎、北川平

左衛門等である秀吉の恩顧に報じようとしたのか、それとも近江閥の三成に親近感を覚えていたのかは不明であるが、主君が三成に毒殺された噂があれば仕官はしないであろう。

有名な話が「利家夜話」にある。太閤全盛の頃、氏郷が自分の屋敷に友人の前田利長、細川忠興、上田主水正、戸田武蔵守などを招き、雁の料理を振る舞っていた。話が進むうち、天下取りの話題になり、「太閤没後、誰が天下を取るか」と質問が出たという。

即座に氏郷が、「それぞれ、あの男さ」と利長を指さした。

「合点がゆかぬようだが、今の形勢で大納言（利家）の他にどれほどの人物がいようか。その上、北陸三州の主で、京までの道筋に邪魔になる者もない、西国の毛利輝元が上洛しようとするれば、備前に婿の宇喜多秀家が控えているし、関東の徳川家康が上洛しようとするれば、この飛騨（蒲生飛騨守）が会津におる。即座に食らいついて、箱根を超えさせぬ」如何にも利家鼻根の氏郷らしい話であるが、氏郷が天下を取るか取らないかは別にしても、関ヶ原まで生きていてほしかった武将の一人であることは間違いがない。

部下に対する過分なる知行分け

氏郷は私欲が乏しい人物で、会津に大領を得ると、なるべく家臣たちに多くの領地を与えようとした。普通ならば一万石が妥当な者に対し、二万石、三万石と与えようとしたために、そのまま実行すると、領地が足りなくなってしまうことが判明した。そして氏郷自身の領地が少なくなりすぎ、軍役を果たせなくなってしまう、と重臣たちから指摘された。このため、氏郷はやむなく領地の配分を重臣たちに任せるが、この話が家中に広まると、家臣たちは氏郷の厚意を有難く思い、益々心服し忠誠心を発揮することになった。

氏郷は人物の目利きにも優れており、これという士には禄を惜しまずに召し抱えていったため、蒲生氏に優秀な武将が集った。

知行も情も大事（車の両輪）

氏郷は家臣にあてた書簡の中で、家臣を召し抱える際の心得を論している。

「まずは家中に情を深くし、それから知行（領地・給料）を与えるべきである。知行ばかりで情がなければ、家臣は主君に心服しない。しかし情ばかりで知行を与えなければ、また同じ事である。知行と情は車の両輪、鳥の両翼と心得よ」というのが氏郷の考えであった。

氏郷は自ら能を演じて家中の者に見せたり、頭巾をかぶって風呂をわかしたりと、家臣たちを接待した、という話があるなど、気配りを忘れない人柄でもあった。

また、陣中で眠気を覚ますために博打を打つことを認めており、軍法の遵守には厳しかったものの、融通を利かせる性格でもあった。

葛西・大崎一揆勃発

また小田原遅参によって改易された下野小山氏に代わって藤原秀郷の嫡流となり、家紋を立鶴から三頭の左巴に変更した。秀吉は黒川城を出発するに際し、氏郷と木村吉清を召し出し、両人の手を左右の手にとって「今後、氏郷は吉清を子とも弟とも思い、吉清はまた氏郷を父とも主とも頼み、京都への出仕はやめて、時々会津に参勤し、奥州の非常を警固せよ。もし凶徒蜂起のことがあれば、氏郷は伊達政宗を督促して先陣させ、氏郷は後陣に続いて非常の変に備えよ」と諭したという。しかし間もなく、東北で大規模な一揆が発生した。「葛西

おおさき大崎一揆」という、秀吉に領地を没収され、不満を抱いていた葛西氏（鎌倉武士の流れ）と大崎氏（斯波氏の後裔）の残党が起こした反乱。そして、事件の裏で糸を引いていたのが米沢の大名・伊達政宗であり、氏郷は一揆と政宗の双方を相手に、事件に対処する困難な状況に見舞われた。

氏郷と政宗が対立した理由

会津は元々、あしな蘆名氏（三浦氏の後裔）という大名が治めていたが、これを政宗が侵略して奪い取っていた。しかしそれを秀吉に咎められ、会津を取り上げられた。秀吉は政宗が勢力を伸ばすことを好んでおらず、関東惣無事令を出していたが、政宗はそれに違反して蘆名氏を滅ぼしてしまったため、代わって氏郷を配置し、東北の抑えとして起用したのであった。政宗は会津をもう一度手に入れたいと思い、氏郷を敵視するようになった。政宗は氏郷を葬ろうとして、暗殺を含め、様々な謀略をしかけて来ることになった。

政宗が葛西・大崎一揆を政宗が焚きつけたのは、彼らの旧領を自分のものにしようとしたからであった。葛西氏と大崎氏の旧領は合わせて三十万石ほど

きむらよしきよで、木村吉清（元・荒木村重家臣でその後、明智光秀に仕えていた）という武将が抜擢を受け、秀吉から支配を任されていた。しかし木村は、元は五千石の小身の武将であるに過ぎず、家臣も少なく不満が高まっている地域の統治を行うには無理があった。

政宗はこの状況を利用し、葛西・大崎氏の残党を密かに支援し、煽って反乱を起こさせたのであった。そして氏郷に討伐を行わせつつ、隙あらば氏郷の暗殺を企んでいたとされる。そうして葛西・大崎領を手に入れ、あわよくば会津も奪取しようというのが政宗の大胆極まる陰謀であった。

氏郷は当初、政宗と協力して一揆の鎮圧を行うことで合意していたが、出陣

直前に政宗の家臣・須田伯耆すだほうきが一揆を扇動したのは政宗である、と氏郷に通報

して来た。さらに政宗の秘書官である曾根四郎助そねしろうすけが、政宗が一揆勢に宛てた密書を氏郷に送ってきたので、政宗が一揆に関与していることが、明解になった。このため、氏郷は政宗と連携するのをやめ、単独で一揆勢に対応することにし

た。この時に長沼城主の新国上総にいくにかずさという武将が氏郷に今回の蜂起は政宗の仕業であり、現地はかなり危険な状況になっている筈、しかも雪が降っていて、通行も難しい状態で土地勘のない場所でもあるので無理に進軍せず、会津にお戻りください」と進言した。これに対し、氏郷は「先に関白殿下より、木村吉清を弟と思って助け、この地を治めよと命を受けている。なので、たとえ途中で死ぬことになろうとも、吉清を見捨てることはできない。信義を失ったら、もはや天下に顔向けができまい」と言い、制止を振り切って出陣した。

木村吉清さぬまは佐沼城に籠城して一揆勢と戦っていたが、いつまでも持ちこたえられるかわからない状態であったので、氏郷は危険を犯して一揆勢を攻撃することに決した。しかし東北の11月下旬で、既に寒さが厳しくなっており、家臣たちの士気は低下していた。

氏郷はこれを受け、素肌に甲冑を纏うパフォーマンスを見せることで、家臣たちの士気を高めようとした。これには家臣たちは奮い立ち、蒲生軍は一揆勢

に占拠みょうじょうされていた名生城を奪い返すことに成功。氏郷は城の守りを固めつつ、一揆勢と政宗の双方を警戒した。

氏郷が秀吉に、政宗の陰謀を報告すると、秀吉は側近の石田三成を奥州に派遣し、事態の收拾を命じた。

政宗が一揆勢への攻撃開始

氏郷が城に籠もって様子をうかがっていると、政宗もまた単独で行動を開始した。一揆勢に占拠された宮沢城を攻略し、佐沼城で孤立していた木村吉清を救出した。そして氏郷の元に木村を送って来たが、氏郷は政宗を信用せず、さらに人質を送るようにと要求した。これに対し、政宗が重臣の伊達成実だてしげざねらを送ってきたことで、ようやく氏郷は会津に帰還した。

この時に政宗は、裏切っていないことを強調する手紙を送って来たが、氏郷は「私は何も気にしていない。ただ、天下のためを思って行動されよ」と返事をしたただけであった。氏郷は政宗の魂胆を見抜いていたが、伊達軍と事を構え

るつもりはなかったので、牽制するに止めたのであった。

秀吉、政宗を査問（政宗の弁明）

翌1591年の正月に、氏郷は木村吉清を伴って上京し、事情を秀吉に報告。すると政宗に上洛の命令が下り、2月4日には秀吉の査問が行われた。

この席で政宗は「自分の花押（印判）には針で穴を開けている。この一揆勢にあてた密書にはそれがないから、偽造されたものだ」と主張した。

秀吉は政宗の主張を認めたふりをし、そのまま一揆勢の鎮圧にあたるようにと命じた。政宗が一揆勢を皆殺しにする

政宗は五月に米沢に戻り、六月ごろから本格的に一揆勢の攻略に取りかかり、激戦の末、一揆勢の拠点となっていた寺池城^{てらいけ}を攻め落とし、一揆を鎮圧した。

八月には一揆勢の主だった武将を呼び寄せると、家臣に命じて皆殺しにした。これは、彼らの口から陰謀が漏れるのを怖れたためだと言われている。

こうして葛西大崎一揆は収束したが、騒動が起きた三十万石の土地は、政宗に希望通りに与えられた。政宗の謀略が成功したのかと思いきや、秀吉はそんなに甘い人物ではなく、全てを見通していたのであった。

代わりに伊達家が先祖代々、二百年にも亘って治めてきた四十四万石の領地を没収し、これを氏郷に与えた。政宗は結局、十四万石を削減される結果となったのであった。元が七十二万石でしたので、この措置によって五十八万石に減封となったのであった。

その上、新しい三十万石の領地は、一揆が起きたばかりで荒廃しており、元の四十四万石とは比べものにならないほどに収入の少ない土地であった。

そして、政宗の領地を氏郷が手に入れたことで、政宗は氏郷をますます憎むことになった。領地の大きさも、氏郷が四十二万石から八十六万石となり、さらに検地の結果、九十二万石にまで増加した。

葛西大崎一揆の結果、氏郷の領地になった安達郡^{あだち}という土地がある。その川向かいに黒塚という土地があったが、ここの帰属を巡り、政宗との間に争論が

発生した。氏郷はこの時、平兼盛^{たいらかねもり}という平安時代の公家が「陸奥の安達ヶ原^{みちのく}

の黒塚に鬼籠もれりと言うは真か^{まこと}」という和歌を詠んでいることを指摘し、人々に「これでいかがだろう」と聞いた。

すると皆が「黒塚は古来より、安達ヶ原に属していることが明らかですな」と言い、これを受けて政宗は黒塚を諦めざるを得なくなった。

氏郷は教養人であったので、このような時にすらすらと古い歌を持ち出し、

政宗をやりこめることが出来た。また、氏郷は侘び茶の大成者である千利休の高弟だったことでも知られており、多芸多才な人物であった。

文禄の役で名護屋に参陣

氏郷は奥州情勢の安定に力を尽くしたが、一方でこの頃、秀吉は大軍を興して朝鮮半島への討ち入り（唐入り）を開始していた。

政宗に対す処罰が甘かったのは、朝鮮と明との戦いに集中したかったので、東北で騒ぎを起こして欲しくなかった可能性も指摘されている。若しも、秀吉が、唐入りでなく国内の安定に力を注いでいたら、大分情勢も変わったことであろう。豊臣政権の滅亡は実に唐入りにあったと思われるのである。

氏郷発病し、名医たちの診断を受けるも回復できず

氏郷は名護屋に滞陣している間に発病し、やがてその病状が悪化した。会津に戻って休養するものの回復せず、文禄三年（1594）に上洛し、名医たち

の治療を受けることになる。秀吉はまなせげんさく曲直瀬玄朔（名医と謳われた道三の養嗣子）を起用し、治療に当たさせた。しかし氏郷は不治の病にかかっており、1593年から95年まで、三年に亘って闘病したものの、遂に回復出来なかった。

キリスト教徒として死す

氏郷は伏見の屋敷で伏せっていたが、その寝室には、キリスト教徒として知られる親友の高山右近が付き添っていた。氏郷は洗礼を受けてキリスト教徒になっており、熱心に信仰していて領内にも布教させていた。このため、その枕元に聖像を掲げ、右近から死後に赴く天国の話聞き、聖像に目を向けながら息を引き取ったと言われている。これは1595年2月7日のことで、氏郷は未だ三十九才の若さであった。氏郷は「かぎりあれば 吹かねど花は 散るものを 心みじかき 春の山風」という、人口に膾炙した辞世の和歌を残している。

毒殺説

若くして有能な武将が死去したことから、氏郷は毒殺されたのではないかと噂があった。これには伊達政宗に毒を盛られたという説と、氏郷の器量を警戒した秀吉が、石田三成に命じて毒殺させたと言った説等がある。しかし、氏郷は三年にも渡って闘病しており、その間の診療記録によると、内臓の病が死の原因だったことが判明しており毒殺説は当たらないと考えられる。

その後の蒲生氏

氏郷が亡くなった時、後継ぎのひでゆき秀行はまだ十三才でしかなく、会津九十二万石の領主を務めるには力不足だろうと秀吉は判断した。縁戚の前田利家等が懸命に奔走しこともあり、秀吉も家康の娘と結婚し、後見を受けることを条件に、会津の継承が認められたのであった。しかし、その後に家中で内紛が起きたことか

ら、慶長三年（1598）になると、十八万石に大減封された上、宇都宮に移封となった。これには秀行が家康の娘婿だったため、石田三成が家康の勢力を削減するために、秀吉に減封を進言したという説もあるが真偽の程は不明である。秀吉は功臣の家督相続については慎重且つ冷徹であった。（丹羽・堀・蒲生）

この結果、会津には蒲生氏に代わって上杉景勝が百二十万石で入府することになった。こうして大幅に領地が削減されたが、秀行は関ヶ原の戦いで家康に味方し宇都宮に待機して、景勝の牽制役を担うことになった。そして戦いが家康の勝利に終わると、上杉領から六十万石を与えられ、会津に復帰した

秀行は娘婿であることから家康の厚遇を受け、徳川の一門衆として扱われ、松平姓も授与された。こうして蒲生氏は引き続き繁栄するかと思われたが、氏郷に似て子孫たちは病弱で、三十才前後で次々と若死にした。氏郷は当時としては珍しく、信長の娘である正室の他には妻を持つことがなく、このために一

族の人数が少なくなっていたことも災いした。四代目の忠知（三代目の兄・忠郷の跡を継ぐ）も三十一才で死去し、後継者がいなかったため、惜しいかな、名門蒲生氏は断絶したのであった。

早世を惜しまれた氏郷の生涯

氏郷は知勇兼備で、千利休も評価した優れた器量を備えた良将であった。家臣たちに厳しく接しつつも、大事に扱って優秀な人材を集めており、蒲生氏の勢力を急速に高めることに成功した。家督を継いでから僅か十三年ほどで、四万石から九十二万石にまで蒲生氏を発展させているので、もしも氏郷が長命であったならば、五大老は当然として前田家以上の大名になっていた可能性は高い。

しかし、氏郷は病に蝕まれたことで、若くして世を去る。活躍したのが、信長の死後、秀吉が天下を統一するまでの時期に限られており、大規模な決戦で主力を担い、その才能を十分に発揮する機会を得られなかった。

参考文献

『氏郷記』 作家不詳

今村義孝 『蒲生氏郷』 人物往来社、1967年

宮本義己 『戦国武将の健康法』 新人物往来社、1982年

池内昭一 『蒲生氏郷』（新人物往来社、1986年）

高橋富雄編 『蒲生氏郷のすべて』（新人物往来社、1988年）ISBN 4-404-01524-0

横山高治 『蒲生氏郷と家臣団—近江・伊勢・会津を駆けぬけた戦国の智将』（創元社、1991年）

門暉代司編著 『蒲生氏郷の生涯』（蒲生氏郷公顕彰会、2011年9月15日）

ルイスフロイス『日本史』